

平成 23 年度第 1 回宇都宮市冒険活動運営協議会会議議事録

○日時 平成 23 年 9 月 27 日 (火) 13:30~15:30

○会場 宇都宮市冒険活動センター 会議室

○出席者氏名

- ・村上 雅之委員
- ・神長 信夫委員 (副会長)
- ・福田 智恵委員
- ・堀江 佳代子委員
- ・佐藤 ハツエ委員
- ・森川 澄子委員
- ・新嶋 高行委員
- ・伊東 明彦委員 (会長)
- ・沼尾 順市委員
- ・田代 広三委員
- ・坂内 剛至委員
- ・糸井 陽子委員
- ・入江 尚見委員

(事務局) 荒川 英利課長, 塩田 雅明所長, 黒須 正宏副所長, 矢野 学指導主事, 駒野 拓也指導主事

○欠席者氏名

なし

○公開 (傍聴者の数 0 人)

- 1 開 会
- 2 あいさつ
- 3 委員紹介
- 4 議 題

(1) 報告事項

- ① 平成 22 年度事業報告について (ア学校受入事業, イ主催事業, ウ利用状況)・・・資料 1
- 事務局 : (資料にそって説明)
- 佐藤委員 : 冒険活動センターの本来の目的ではないが, 被災された方の受け入れは, センター職員が対応したのか。
- 事務局 : 基本的には市役所全体で避難所の運営にあたったが, 最終的にはセンター職員が対応した。食事については, 最初は非常食を提供していたが, レストランからボランティアで炊き出しをしたいという申し出があり, レストランから食事の提供をいただいた。また, 地元の方から何度も炊き出しをいただいた。レストランと地元の方とうまく調整をして, 食事の提供ができた。
- 沼尾委員 : 4 月の初めから女性の組織を中心に活動した。食材については, 地元の農家から協力いただいた。お昼を中心に活動したが, その際, 夕食分も調理して渡すなどした。地元の小学校に通学した子どもが 2 名いたが, 二次避難所に引っ越してから「篠井小」のほうがよかったということを行っていると言っていると報告を受けた。
- 佐藤委員 : 避難されていた方は, 福島県の方が多かったのか。
- 事務局 : ほぼ福島の方であった。津波被害を受けた方もいたが, 原発関係の避難者がほとんどであった。
- 佐藤委員 : 子どもたちは, 震災・原発問題の後遺症などのようなものはあったのか。
- 事務局 : 宇都宮市としてそちらのケアもしていた。保健師がほぼ毎日来て, 心のケアをしてくれた。センターとして特に問題を抱える子どもはいなかったと感じている。避難所の対応としては, 一番よかったのではないかと思う。
- 議 長 : 金銭的な支援はあったのか。
- 事務局 : 国から宇都宮市へ避難者 1 人当たり 3 食で 1,010 円の補助があった。その結果, レストランも炊き出しを継続できた。
- 福田委員 : 23 年度から宇都宮市の宿泊学習の体系が大きく変わる最後の年であったが, どんな思いで, また, 23 年度にどのようにつなげようと意識して活動に取り組んだのかお聞きしたい。
- 事務局 : また, 初めて避難所として取り組んだ経験から今後の災害対策についてどう考えるか。宇都宮の子どもたちの自然体験学習の日数は海浜自然の家での活動分減少したが, 冒険活動センターでの活動日数は同じである。海浜自然の家での分も冒険活動センターでよい思いをさせようと思って取り組んでいる。たとえば, 早く来て, 遅く帰るなどの学校に対して滞在時間を長くしてもかまわないというスタンスで臨んでいる。自然体験学習の泊数は減ってしまったが, その分を冒険活動センターでカバーするという思いでいる。避難所については, センター単独では無理であった。当初, 24 時間体制で市役所から多いときは 10 人くらいの応援があった。市役所全体で対応していこうということであったが, 途中から避難者も慣れてきたり, センター職員が避難所対応に慣れてきたこともありセンターの対応となった。センターとしては, 臨時職員の勤務を止めたり, 学校利用についても実施期日を延期するなど工夫した。5 月の連休明けから通常業務となった

- が、予算、勤務体制、人の配置などが今後の課題としてあげられると思う。
- 荒川課長： 冒険活動センター以外にも宇都宮サイクリングターミナルが避難所となった。あちらは指定管理者になっているため、市と連携を図り、当時一般の予約がかなりはいつていた状況であったが、予約をお断りして避難所となった経緯がある。
- 福田委員： 地元の小学校が春先に冒険活動教室が予定されていて子どもたちは楽しみにしていたが、避難所になったことでがっかりしていた。期日延期で実施できたことは、大変よかった。100年に一度あるかないかの災害であったが、ぜひ取り組みをまとめて今後に生かしてほしい。
- 事務局： 避難所のノウハウは蓄積できた。
- 福田委員： 避難者の宿泊先をロッジにしたのはなにか意図があったのか。
- 事務局： テント、アリーナを使用すれば300人近くの人を受け入れることができたが、3月11日ごろの気温と、ロッジに入った人とそれ以外の場所になった人との格差を考慮して、ロッジのみでの受け入れが妥当だろうと考えた。
- 糸井委員： 同じで福島からの避難者で受け入れの優先順位はあったのか。
- 荒川課長： 優先順位はなく、来た方から順に受け入れたかたちであった。
- 議長： 震災の対応は興味深いところではあるが、震災関係以外でなにかあるか。
- 新嶋委員： アンケート8ページ「リヤカー利用について」キャンプ協会でも利用しているが、できれば1台だけでも食材や荷物の搬入のための車の乗り入れは許可にならないか。検討していただきたい。
- 佐藤委員： 私も以前利用したが、搬入するときだけ許可いただきたいと思った。特に天気がよくなかったのでそう思った。当時、許可をお願いしたがセンターの方針に沿ってということであった。
- 事務局： 乗り入れることによって子どもたちの安全を確保できないという点がある。ご指摘の意見とともに窓口で「車の乗り入れがなかったので安心して子どもが活動できた」という意見もある。また、1台だけ、搬入だけといってもなかなかその部分がうまくいかないという点もある。今のところ、理解を得てこのようなかたちでお願いしている。リヤカーについては、修繕したり、新しいものを購入したりして、多くの方に利用しやすく使っていただけるよう整備を進めている。車の乗り入れについては、今後も検討をしていきたい。
- 佐藤委員： 利用時に病人がでたが、その際すぐに車で対応してもらった。ケースバイケースであろうと思う。
- 事務局： 緊急時や天候がどうにもならない場合などには、センターで車を出すなど対応している。
- 田代委員： 活動プログラムの集計結果から、「自然観察体験」の利用が全体的に少ないようだが、なにか理由があるのか。
- 事務局： 複合的なものとして活動しているのであれば統計に反映させた方がよいのではないかと前回もご指摘があったが、どのように反映させていくか悩むところである。資料は、プログラムとして提供したものをカウントしている。実際には、活動のなかで自然観察をする場面が多々あるが、プログラムとして「自然観察」を選んだかどうかの資料となっている。

② 平成23年度事業計画について（ア 学校受入事業、イ 主催事業）・・・ 資料2

- 事務局： （資料にそって説明）
- 沼尾委員： 9月17日に地域の敬老会で冒険活動センターを利用した。当日、市長にお会いしたら大変喜んでいて。市長から「ここは一般利用が課題である。地元で利用してもらったことに大変感謝している。」と言われた。年に一度は地元のイベントを冒険活動センターで実施したいと考えている。
- 10月16日の「子どものもりフェスティバル」については、地元として近日中に準備にはいたい。
- 議長： 学校関係からなにかあるか。
- 神長委員： 本校は夏休み明けすぐの実施であったが、五山の登山が計画されていたので熱中症が心配だった。生徒には500mlを2本持たせていたが足りなかった。センター職員の予備の水分をもらい助かったと聞いている。職員も感謝していた。暑い中、5つの山を登ることができたことは生徒、職員とも達成感を得る活動となった。
- また、今年から地域学校園の取り組みということで、瑞穂野学校園の話があったが、今後縦割りでの取り組みが始まっていくのだなと感じている。ただし、すべての地域学校園でできることではないので、なにか新しい取り組みができるとよいと思う。
- 小中一貫ということで、小学校と中学校の交流を意識するが、「小小交流」と聞いて、

そういわれると小学校同士の交流はあまりないのではないかと思います。このような場面で小学校同士が交流することはよいことであると感じている。さらに、小学校5年生と中学校1年生は2年後に中学校で一緒になる。そういう観点でとらえるとよい体験になると思う。

事務局：センターでは、熱中症対策としてジャグを用意し、冷水を補充できるような体制をとった。また、登山時には職員が4~6Lの非常用の水分を担いで、対応している。熱中症については、今後も気をつけなければならない点として対応していきたい。

村上委員：交流について、「小小交流」なども初めてここでいう話や隣の学校だがお互いに知らないという子どもが多く、先生方からも良い機会を与えてくれたという意見が聞かれた。様々な場面で活動を広げていければと考えている。

事務局：本校は7月利用であったが、ジャグの準備はありがたかった。学校園の交流について子どもたちは3校でのキャンドルファイヤーが印象に残っていたようで、小小連携・交流は可能であるし、やっていくことに意味がある。

話はちがうが、7月に冒険活動教室を実施し、照明が何箇所か壊れていて暗かった印象を受けたようだ。そちらについては、本課の対応であろうが、施設の改修・修繕については早めに進めていただきたい。利用時に多くのスズメバチを見かけたと聞いているが、子どもたちが利用する場所なのでハチの駆除をお願いしたい。

課題ばかりになってしまうが、市の方針であるから学校で対応するしかないが、昨年までは4年生が冒険活動教室で1泊、5年生が海浜で2泊、6年生が修学旅行で1泊と系統性があったが、来年度から突然5年生の2泊はきつかなという意見が教員からあがっている。教員サイドのケアもしていかなければならないし、子どもたちも慣れていかなければならないと感じている。

先ほど、所長から朝からぎっしり活動できるという話があったが、その逆もあってもよいのかなと思う。負荷をかけすぎないようにという考え方もある。また、市の財政を心配しても仕方がないが、バスについても前日利用の学校が帰るときに合わせて、センターに着くようにすれば、経済的な部分も解消できるのではないかと思います。いろいろな方法があると思うが、新しい制度がなじんでいけばよいと思う。

事務局：ありがとうございます。

照明について、できるものはこちらでチェックして、また夜間に警備員に確認をしてもらうなどして改善していきたい。それ以外にも職員だけでは修繕できない地下深く掘り下げての作業などが必要なものもある。自然にやさしくという観点から全体的に照明を暗くしているところもあるので、暗かったという印象を受けたのかもしれない。

スズメバチについては、確認ができたらすぐに対応しているが、森全体からスズメバチを完全に駆除するというのは得策ではないと考えている。うまく住み分けができて、子どもたちの活動場所にはいないように対応はしているが、活動場所に出てくることもある。園内の巡視を行い、すばやく対応できるようにしたい。

今年度は4年生で来た経験を生かして、5年生ではこんなことをやらせたいという思いをもってプログラムを組んでいるところがあった。来年度以降は、初めて利用する子どもたちなので、こちらからも少しゆとりをもった活動を勧めたいと思う。

バスの件についても、今後検討していきたい。

森川委員：冒険キャンプのビデオを見て、子どもたちの顔が生き生きしていてすばらしいと感じた。この事業がそれだけ効果があるということだと思う。しかし、このような事業に参加できている子とできていない子との差ができてしまうのではないかと感じる。親子関係が重要だと感じる。親に関心がないとこのような事業に参加できない。このような事業に参加することで社会性や協調性が育まれていくのだと思う。今の子どもには社会性や協調性がない。しかし、自然体験をしているという子どもはそうではないと感じている。活動に取り組んできた子どもは積極性や社会性が育つのに、そうでない子どもとも差ができていくと感じる。社会的な問題だと思うが、今そのように感じている。また、5年生の2泊は特に問題があるとは思わない。

事務局：自然体験をした子どもには変容が見られるという話については、この施設でやっていかなければならないと考えている。市内の小中学生は、教育課程のなかの冒険活動教室で自然体験をする。また、こちらは公の施設であるので主催事業を通して多くの方に自然体験を提供していけるとよいと思う。

森川委員：私たちは、ネイチャーゲームなどを提供しているが、参加者はいつも同じである。

佐藤委員：小小交流ということで学校をばらしてのグルーピングを行ったようだが、そのグループで3日間生活したのか。

事務局：活動時のみ、そのグループで行った。生活の場面では、まだ行ってない。

佐藤委員：ガールスカウトでは、県内での活動は団を解体してグルーピングを行い。そのグループ

で生活をする。そのグループ内で黙っていたり、自分の意見を出さなかったりしていると仲間にはいることができない。そのような体験を通して、次はなんとか自分を表現しようという気持ちが出てくる。せつかく小小交流で、いろいろな学校とのグルーピングができたのだから、そのグループを活用できるとさらによいと思う。

新嶋委員：今年、施設を利用してキャンプを行ったが、昨年の経験から今年もカブトムシをとることを楽しみにしていた。今年、その木は切られていた。昨年も樹液がでていてハチがいた。その奥の木は、シートで巻かれていた。利用者と管理者との考えかたの違いがあるのはわかるが、自然体験をする場としては「行き過ぎ」ではないかと感じる。そのへんの兼ね合いは難しいところだが、切ってしまうのは「行き過ぎ」、巻くのは「仕方ない」。しかし、それによって完全に自然は破壊される。利用者の意見として聞きとめてほしい。

基地作りでロープを木に巻きつけていたが、私たちは木を痛めないという観点からロープを巻くときは必ず布を巻くという指導をしている。教育的な意味を含めて子どもたちにそのように指導している。その点について気をつけてほしい。

議長：ありがとうございます。

問題提示してもらい、大変ためになる。

福田委員：今年度から先生方の研修会を1日増やしているが、内容の充実が目的なのか、連携を深めるための打ち合わせなのか教えてほしい。

事務局：先生とのきめ細かい打ち合わせができる場として設定している。さらに時間が必要な場合は、学校に訪問して打ち合わせを行っている。

福田委員：小中一貫の流れで、小学校、中学校の先生が一同に集まって打ち合わせを行うのか。

事務局：小学校の場合、冒険活動センターを会場にして、午前中はプログラム相談、午後は体験研修を行っている。午前中の時間を利用して活動場所や生活の場の調整など行っている。

中学校がからむ場合は、中学校会場で行うことが多い。

新嶋委員：ロープの件だが、ロープワークの練習時は布を巻かない。加重をかける場合は、布を巻いて行ったほうがいい。

事務局：当施設では、ロープを縛ってよい場所を限定して行っている。その場所は、いずれ伐採をする場所である。ご指摘のとおり、教育的によくはないと思いながら、場所を限定して行っている。いずれ森を広げて、新たに木を植えていくという考えである。

村上委員：福田委員の話で、小中一貫からみ、打ち合わせや活動を丁寧に行っていることはわかったが、それについて人的な増員についてはどう対応しているのか。

事務局：指導にかかわる臨時職員を年間1割増員した。活動が充実するように対応している。

村上委員：増員していただけるとありがたい。

(2) 協議事項

① 今後の冒険活動事業について・・・資料3

事務局：(資料にそって説明)

議長：すでに22年、23年の報告で意見をいただいているが、ほかにあるか。

入江委員：放射線量の計測は行っているのか。北に行くほど高いデータがあるが、計測して公開してほしい。水辺のほうが高い値らしいが、カヌーの活動場所についても計測したほうがよいと思う。また、今年は「国際森林年」になっており、国際的に森林管理・利用について考える年になっているので、そこに関連した取り組みがあったらよいと思う。ここは緑に囲まれ、木々が豊かだが、森の手入れのための間伐作業を見学したり、実際に間伐体験をしたりするなどして森の管理の大切さを教える場面があるとよいと思う。「木は生きている」ということを知らせるために、実際に体験することは重要なことだと思う。

事務局：放射線量については、今後計測器を1台保有して定期的に計測していくことになると思う。現在までは計測していない。近隣の小学校等の値が安全であるというデータをうけて活動している。

入江委員：それでは不安。心配である。

事務局：指摘された場所について、特に水辺についても意識して調べていきたい。

入江委員：計測して安全であれば、安心することができる。

事務局：今後、本課と連携し、1台配備されるよう継続して要望する。

荒川課長：まず簡易的に計測できるものを全校に配備して、今後それを補充していくことになる。

入江委員：放射線の問題は、一生付き合っていくことになるのだろう。

事務局：森作りの提案はおもしろいと思う。プログラム化されるとおもしろいが、どの学校でもやるわけにはいかない。参考にしていきたい。

福田委員：地域学校園を基本に組み合わせて交流しているというが、学校によっては複数の中学校

に分かれて進学するところもある。そういう学校では、地域学校園の交流をすることで疎外感を感じたり、不公平感を感じたりするという保護者の意見を多く聞く。複数校に分かれる学校園のほうが多いのではないか。

- 議長： 実際はどうか。
- 神長委員： すべての地域学校園でできるわけではない。小規模校ならではの取り組みになるのではないか。
- 福田委員： ここだけではなく、いろいろな取り組みのなかで小中一貫を意識された取り組みがなされているが、地域学校園の交流にこだわらず、他の学校との交流というスタンスで考えられるとありがたい。子どもたちが交流を通して自分を表現することは大切なことだと思う。
- 事務局： ありがとうございます。ご指摘を受け、改めて気を配らなければいけない点だと思う。
- 福田委員： 他の学校と交流することや、自分を表現することが大切である。小中一貫が強くてしてしまうと違うような気がする。
- 事務局： 森の中の木を切るのはどこがやっているのか。
- 坂内委員： 森林組合が森の管理の委託業者となっている。場合によっては職員が切ることもある。平成 23 年度からシステムが大きく変わり、現場の先生からの戸惑いの声が多いかと思っただが、そうでもなかった。それは学校とセンターとの連携がうまくとれていることだと思う。半年まだあるので、不慣れな分、問題が出てくるかもしれないが、今回のこの会議で話ができればよいと思う。先ほどの「参加する子としない子では差が生まれるのでは。」という点について、そういう事業に参加させる親は、小さいころに自分が自然体験をしている親が多い。小さいころに自然体験をしていない親は、自然体験の良さがわからないので参加させない。やはり親から変えていかないとならない。私も民間で教育のために自然体験を企画しているが、本来参加してほしい子どもは参加してこない。教育的効果をあげるためにそういう子をどう参加させるかが課題になっている。冒険活動センターで、親を教育するプログラムをやってみるとおもしろいのではないか。そういう活動ができるのは、公の施設でないとなかなかできないと思う。学校、教育機関とうまく連携して、そういった事業ができるとよいと思う。
- 議長： 親の教育は学校現場においても大きな課題であると思う。
- 事務局： 依頼を受けて「親学」講座をやったこともあるが、そういったところを広げて事業展開していけるとよいと考える。同様に、そこに参加する人は、比較的意識の高い人であり、どのように広げていくかが課題である。主催事業などを実施し、さまざまなかたちでの参加のきっかけを設けられるとよいと思う。
- 村上委員： 親の教育は学校も困っている。実際、行事等に参加する人は意識の高い人。参加してほしい人が参加しない。それが課題である。いろいろなアプローチをするが、なかなか結果につながらない。
- 議長： 学校だけではなかなか解決できない問題であろう。
- 神長委員： 自分が小さいころのイメージでは、育成会・子ども会で自然体験をしたが、今はディズニーランドへ行ったりしている。もっと育成会などで自然体験の場を設定することも必要だと思う。冒険活動教室においても、2泊3日で充実した活動をしているが、3泊4日であればもっとのんびりできると思う。さまざまな施設や場所を使って自然体験できると良いのではないか。
- 糸井委員： 一般の参加状況について、冬の土日利用、エンジョイサタデーの参加人数が減っているような気がする。冬場は星空観察などが適していると思う。一度参加したが2時間では時間が短い気がした。短時間で参加できる新しい事業の展開を考えてみてはどうか。
- 事務局： 中学校の登山では、PTAで差し入れをした経験があるが、今はそこまでやるのは過保護なのか。また、ジャグを準備するなど職員にどこまでお願いできるのか気になる。
- 事務局： 暑い夏であったが、こちらではなにか環境的な変化はあったか。
- 事務局： 一般受け入れについて、たしかに冬場の利用は少なくなる。それは、この施設自体が野外での活動が主なものになるので、どうしても夏場、季節の良い時季が多くなる。工夫して対応していきたい。昨年度は、冬場に環境ミーティングを行いたいという団体を受け入れたこともある。そのような団体や講座などを取り込みながら利用を増やしていくことも一つの方法と考えている。
- 事務局： エンジョイサタデーについては、今年度は実施回数が減ったが、利用人数としては近年増加している。今年度は、土曜日に学校利用がはいってしまった関係で、土曜日実施のエンジョイサタデーは実施が難しい。その点をカバーするために「子どものもりオープンデー」を企画した。今後の課題と考えている。
- 事務局： 冬の星空観察については、一昨年まで実施していたが、参加者がなかなか集まらないのが現状である。外部に指導を依頼するのだが、季節と開催時期のタイミングがなかなか

か合わない。今後、時期も含めて考えていきたい。

登山の水分の搬入については今でも保護者の差し入れはある。

センター内での環境に変化がみられたかということだが、特に大きな異常はない。そのことと関係があるかわからないが、今年度はイノシシを見かけていない。下草刈りの成果なのかかわからないが、住み分けがうまくいっていると予想している。

糸井委員： 幼稚園関係の受け入れが増えているそうだが、正直冒険活動センターの趣旨とはちがうかなという印象をうけるが、どのような利用形態なのか。

事務局： お泊り保育の形態が多い。週末での利用や夏休みの利用などがある。活動としては、登山をやったり炊飯をやったりして、よい思い出を作っているようだ。

糸井委員： 園内が暗いということだが、暗いこと、怖いことはよい体験だと思う。勇気のどうかつのようにわざわざ暗い環境を作ることやテレビも電気もない環境で生活する体験はとても貴重な体験だと考えている。そういう話をオリエンテーションなどで話してもらえないか。

事務局： 一般の受け入れでは、入所時のオリエンテーションで説明している。もっと前向きに夜の暗さを楽しんでもらうような話をしていきたいと思う。学校についても同様に説明しているが、照明が壊れているところがあるなど改善すべき点があるので対応しながら、こちらの趣旨も理解してもらえるようにしていきたい。

議長： 予定時間が過ぎているが、ほかにあるか。最後に事務局から説明をお願いします。

事務局： 次回の話し合いのテーマとして提案を考えている。宇都宮市の流れで受益者負担の考えから炊飯場の使用料金をとる方向で検討を進めている。次回、ご意見をいただきながら検討をお願いしたいと思う。こちらでも内容を吟味して、あらためて提案をしたいと考えている。

議長： その他意見はあるか。次回はいつか。

事務局： 2月を予定している。近づいたら連絡をする。

議長： これで協議を終わる。